

C・W・ミルズにおける大衆社会論構想の諸契機

—ある政治的社会学者の苦悩—

伊 奈 正 人

はじめに

本稿の目的は最近のミルズ研究の諸成果を参照・紹介しつつ、ミルズにおける大衆社会論構想の諸契機を析出・再構成することである。これは社会学思想史における精神史的接近の試みであると同時に、ミルズ社会学の学説史的定位・理論的継承発展の為の基礎作業である。

何故なら政治的・学問的論争の渦中にあり、そのはざまに動揺する彼の社会学を、性急な批判から救出し、現代的意義を明確ならしめる為には、その動揺の本質を見定める迂回作業が不可欠であるからである。考察の眼目は、アメリカ社会に生きたミルズをの精神史を、思想的営為・

科学的営為の両側面について検討し、大衆社会論構想の理想的・現実的契機を析出、もって論理を再構成することにおかれる。

(1) 次のギラムの伝記研究には、とりわけ依拠するところ大である。Gilliam, R. *The Intellectual As Rebel: C. Wright Mills 1916—1946* unpublished M. A. essay Columbia Univ. 1966 [以下 RG ①] Gilliam, "White Collar: From Start to Finish," *Theory and Society* (Jan. 1981) [以下 RG ②]

(2) この視座を形成するのに参考にした文献は以下のとおり。良知力『初期マルクス試論』一九七一 石田忠「原爆と人間」『一橋論叢』八三巻二号一九八〇 Hegel, G. W. F. Vorrede *Phänomenologie des Geistes* 1807 Mills, C. W.

The Sociological Imagination 1959 [KILSI] Becker, E.
The Lost Science of Man 1971

一 自己陶冶

二〇世紀初頭のテキサス。開拓者とカウボーイのイメージは、産業主義とミリタリズムによって塗り交えられようとしていた。そのテキサス州ウエイコーに一九一六年ライト・ミルズは誕生した。家系はイングランド・アイルランド系、父は保険会社勤務のホワイトカラーであった。自分は十歳の頃から『ホワイトカラー』⁽¹⁾を書いてみると、後にミルズは回想している。祖父は産業主義もポピュリズムもフロンティアに届く以前、テキサスに入植したカウボーイで、気骨・独立の心をもつ根っからのテキサンであった。最後はガンファイトに散ったこの祖父の思い出は、後々までミルズの誇りとするところだった⁽²⁾という。

独立に対する鉄の意志、子供のような傷つきやすい感性、注意深い職人性、卓越した知性と理性への信頼、そしてラフ・アンド・レディのテキサス魂をうけつぐヤングテキサン。母および彼自身の回想、いくつかの伝記を

照合する時浮揚する青年ミルズ像は以上のようなものである⁽³⁾。この自己形成期に彼が暮した町のうち、古き良きテキサスの面影残すウエイコー、シャーマンは彼に休らぎ、親友を与え、新テキサスの顔たるフォートワース、ダラスは苛立ち、孤独を彼にもたらした。暫時を除き明らかに彼は反抗的問題児であった。当初彼の孤憤は大部分、気質的な無軌道のものであったが、やがて明確な表現を見出すに至る。一九三五年ミルズは地方振興の先兵たるテキサス農工大を一年で退学した。彼はその師友を「ミリタリーロボット」というイメージで捉えている。⁽⁴⁾心の傷となったこのイメージは彼の積念の結晶に他ならない。そして彼は学問に没頭すべき自分を見出していた⁽⁵⁾。

ミルズは一九三九年テキサス大学で修士号を、そして一九四一年ウィスコンシン大学で博士号を取得している。この時期彼はC・E・エアーズ、H・ベッカー、J・R・コモンズ、S・パールマン、E・A・ロス、そしてドイツからのエミグレ、H・ガース等のもとで研究に没頭した。彼は産業化に伴ったコミュニティの解体、およびその科学的再組織化の問題に取り組んだアメリカ哲

学・社会科学から多くを学んだ。内観主義、ヴントロヘーゲル主義を批判し、機能主義・社会行動主義を創造したプラグマティズムをミルズは高く評価した。すなわちその社会心理学の経験科学的精神を彼は共有していた。彼はマンハイム等ヨーロッパ知識社会学の問題提起をうけつつも、この社会心理学を援用することにより、哲学的抽象性を打開し、知識社会学の経験科学化をはかっている。⁽⁵⁾ また同時にその自律的人間観も、彼にとり一つの理想として容認しうるものであった。しかし理想的人間の実在を主張する時、それは彼にとって批判の対象となる。社会学者ミルズは、サムナーの保守主義でもなく、ウォードの改革主義でもなく、ヴェブレンのシニカルな懷疑主義を継承していたと言ふことができる。彼は批判的分析に耐えるよう、その社会心理学を修正し、⁽⁶⁾ さらにプラグマティズムの知識社会的批判を行なっている。

他方ミルズはガースをつうじ、ヨーロッパ社会科学の伝統に学んでいる。「カリスマ」「残基」「情動の民主主義」「ビヒモス」「大衆」「超自我」等、人間の非合理的要素の発見。そして一方で社会主義国家の成立、他方でファシズムの擡頭を背景とする国家支配の問題の深刻な

対象化。ミルズはこれらをヨーロッパの伝統から学んだ。ここにはガースのファシズム体験とミルズの懷疑精神の共鳴が見られる。「彼はヴェブレンとウェーバーを好んで重ねあわせようとした。」後にガースはそう回想している。⁽⁸⁾

この大戦間にアメリカ社会が経験した大恐慌・ニューディールは、結果として自らの活力の確認となった。保守主義と改革主義の対抗にも応急的決着がつけられ、社会学者達も国家政策をつうじた民主的改革運動に参加してゆく。かくして政策的社会科学として大量調査技術・論理演繹的システム理論が整備されてゆくところとなる。そこには理想の科学的・計画的実現のエートスがある。⁽⁹⁾ しかし周辺人としてのミルズは「制度派主流」とも異なり、ヴェブレンの原点を貫いた。彼を支配していたのは、社会の経験科学的分析・批判のエートスであった。

(1) Mills, C. W. "From the Author" *Book Find News* 1951 年 4 月 5 日 RG ② 参照。

(2) Coser, L. A. "Radicalism and Individualism." *The Justice* May 3 1962.

(3) Mills, C. W. "This is the History of the Youth of Our Son" March 29, 1954 Mills, C. W. *Towarich: Contacting*

the Enemy (5) 149 RG ①, RG ② から引用) 他 Press, H. C. Wright Mills 1981 etc.

(4) RG ① p. 1~44 RG ②

(5) Mills, C. W. "Language, Logic and Culture." *American Sociological Review* vol IV No. 5 1939.

(6) *ibid.*

(7) Mills, C. W. *Sociological Account of Pragmatism 1942* Ph. D. Dissertation Wisconsin Univ.

(8) Gerth, H. H. "C. Wright Mills 1916—1962." *Studies on the Left* vol. 2 No. 3 1962.

(9) この土台のヨーロッパからの輸入およびアメリカでの展開の詳細については稿をあらためなければならぬ。

二 政治的覚醒

一九四一年学位取得後彼はメリーランド大学準教授の職に就く。ミルズ二五歳の時である。同年真珠湾攻撃により第二次大戦は本格化した。しかし他方国内の失業問題は解消、生産は増大、政府支出は格段に伸長した。だが三〇年代のラディカリズムは停滞、転向があいついだ。ミルズはここに「不況—戦争—好況」というアメリカ史のリズムを感得していた。⁽¹⁾そして進歩的アメリカ民主主義、その主体としての諸階層のイメージは実像なのか、

アメリカの航路決定者は誰なのか、そうした問題意識が醸成されてゆく。ミルズは明らかに変貌を遂げていた。知識人・労働者が右傾化する中、彼は政治的知識人として自らを定位し、活動してゆく。その模様を彼は次のように回想している。「三〇年代、私は二〇年代の世界に生きていた。そして四〇年代初頭、私は三〇年代の世界で活動していた。」⁽²⁾と。

政治的打開にむけた、問題の歴史的・構造的分析和批判。この幾分スローガン化された格率が、彼の武器とする「論理」であった。様々な観念・現実の交錯の中、ミルズは現実には切りこんでゆく。その論説は戦争・人間疎外・ファシズム等への危機感に深く根ざしている。暫くそれを見てゆくことにしよう。

『経営者革命—世界で何がおこっているか』⁽³⁾元トロツキストJ・バーナムは、ガルブレイス等に先駆け、一種の收斂理論を展開していた。——新しい種類の社会が世界の超大国の中でおこっている。そこでは未来の制御は、資本家に委ねられているのでなければ、労働者に委ねられているのでもない。それは機能的に欠くべからざる経営エリートに委ねられている。こうした彼の見解は、二

ニューディールの風調を背景に、ヴェブレン、さらにはバリー、ミーンズ等の所説をおしすすめたものである。戦後の福祉国家・企業自由主義体制下のテクノクラシーを透視している点において、今なお現代資本主義論の古典とも言ふべきこの書は、当時においても大きな反響をよんだ。これに対しミルズは批判をくわえる。⁽⁴⁾——バーナムの所論には文化的ベシミズムが固着しており、「歴史の変動について……階級構造の現実の機能を考慮していない。」しかもバーナムは「世界で何がおこっているか」という副題にもかかわらず「戦争に駆りたてる力については説明しないで済ましている。」「バーナムにとって戦争は『社会にとり自然なもの』であり、ある機構・組織へむかう動きを促進する」ものなのである。こうしたバーナムの戦争観は、経済的危機の「解決」にあたり、ヒトラー的帝国主義へつきすすむ危険を内包している。こう批判するミルズには、後の大衆社会論者の面影はまだなく、社会主義者の相貌を湛えているとすら言えるであろう。

さて他方ミルズは現代社会の疎外状況を、マルクス、ジンメル、そしてとりわけフロム、ホルナイの影響⁽⁵⁾下に、

社会科学的に見据え、その政治的打開をはかろうとしていた。そのミルズの意志は、モリスの『人生の道』⁽⁶⁾への書評⁽⁷⁾に窺い知ることができる。モリスは現代社会の「自己⁽⁸⁾隔離」^{フュニストレンジメント}「自己疎外」の問題を対象化し、打開の方途を世界の様々な宗教の中に読みこむ。そしてさらに自らの宗教的人生哲学を展開している。ミルズにとって、ブラグマティズムのかつての理想主義とは異なるモリスの問題設定は、一定程度評価できるものであった。しかし「マルクス、ジンメル、フロイト等によって充分証明されてきた」「自己隔離の社会的状況からの生成」という視座はモリスにはない。かくしてモリスは問題の政治的解決をめざすことなく、社会科学の視座欠除の悪循環の中、問題を宗教的に解消してしまふ。それはミルズにとり批判の対象に他ならない。

それではミルズの危機感の核心はどこにあったのか。それを大衆社会論の古典『ビヒモス』⁽⁹⁾への書評⁽¹⁰⁾に探ってみることにしよう。——ドイツの「全体主義的独占資本主義国家」においては、独占資本・ナチス・官僚・軍隊という四つのエリートの支配が行なわれている。彼らは経済的危機打開の為に国家社会主義というイデオロギー

的偽装を施し、大衆を侵略・虐殺という非合理的行為に走らせた。こうした「政治的示唆を含む」ノイマンの分析を、ミルズは高く評価した。テキサン・ミルズにとり、自律的暴力は肯定しうるものであった。⁽¹⁰⁾しかし自律性を喪失し、イデオロギーに踊らされる暴力の姿は、怒りの対象に他ならなかった。そしてノイマンの示すドイツの現状は、「民主主義体制における資本主義国アメリカ」に生きるミルズに「迫りくるかもしれない苛酷な未来」⁽¹¹⁾を暗示するものであった。ミルズは言う。「理念は政治の仮面にすぎぬ。たとえばあのゲマインシャフトのイデオロギーは、合理化された社会の非人格性を隠蔽するものである。アメリカというサイロの中で『第一次集団』社会から学ぶアカデミックな社会学者よ、注意せよ。ジェフ・アーンソンは一八二六年に死んだのだ。官僚制の浸透により人間関係が非人格化にしたがい『ロシュニティ』や『リーダーシップ』というイデオロギーが押しつけられてきた。」と。

以上青年ミルズの批評ぶりを見てきた。その若輩、素朴を指摘するのはあまりにたやすい。一徹な懷疑精神による歴史的・構造的分析の可能性をむしろ評価すべきと

ころであろう。はたしてミルズの批判精神はこの水準に安住しはしなかった。やがて一つの作業仮説が熟成してゆくことになる。オーバーラップする欧米の状況。この判断はミルズのアメリカ大衆社会論構想の基本モチーフである。ともかくも彼は一方で社会学者としての地歩を固めつつ⁽¹²⁾、他方で確実に政治的知識人として歩み始めていた。D・マクドナルドとの出会いがこのミルズを開花させることとなる。

- (1) Mills, C. W. *The New Man of Power* 1948 (以下 NMP) Mills, *White Collar* 1951 (以下 WC) Mills, *The Power Elite* 1956 (以下 PE)
- (2) RG ① p. 71 (Mills, *Tovarich* Five p. 10 以下)
- (3) Burnham, J. *Managerial Revolution: What is Happening in the World* 1941
- (4) Gerth, H. H. & Mills, C. W. "A Marx for the Managers" *Ethics: An International Journal of Legal, Political and Social Thought* vol. 52 No. 2 (Jan. 1942)
- (5) Fromm, E. *Escape from Freedom* 1941 Horney, K. *The Neurotic Personality of Our Time* 1939
- (6) Morris, C. *Path of Life: Preface to World Religion* 1942
- (7) Mills, C. W. "Pragmatism, Politics and Religion"

The New Reader Aug. 1942 & Sept. 1942

(8) Neumann, F. *Behemoth: The Structure and Practice of National Socialism* 1941

(9) Mills, C. W. "Locating the Enemy: The Nazi Behemoth Dissected" *Partisan Review* (Sept.—Oct. 1942)

(10) RG. ① p. p. 75~78 [Tovarich Five p. 6 46]

(11) 前掲論文の他 Mills, C. W. "The Political Gargoyles" *The New Republic* April 12. 1943 等を参照。

(12) Mills, C. W. "The Professional Ideology of Social Pathologists" *American Journal of Sociology* vol. XLIX No. 2 (Sept. 1943)

三 独立ラディカル

マクドナルドは周知の如く社会批評家・独立ラディカルの思想家である。彼は一九四三年までP・ラーフ、W・フィリップス等と共に『バルチザンレビュー』の編集にあたっていた。しかし雑誌『フォーチュン』との関係、第二次大戦に対する立場、ハイブラウな文学趣味をめぐる確執が財政問題を引金として噴出し、彼はそれを去る。下はその絶縁の辞である。——この雑誌にはびこるアカデミズム、「冒険主義」へのしりごみ、今回の戦

争のような重要問題への保守的態度には飽き飽きしていた。編集者の中でマルクス主義を堅持していたのは自分だけだ。まさに政治的論評が切に望まれているこの時に、この雑誌は政治問題に口を噤んだままだ。「私は政治についての新しい雑誌をはじめ」「バルチザンレビューは、政治理論の分野は他の雑誌に委せ、文化問題に専心するがよい。」

ミルズが彼と出会ったのはこの頃のことである。——「その時ちょうど故郷のテキサスからメリーランドに移ってきた……ミルズが私と……接触をとるようになり……彼は次のように提案した。この雑誌は政治について扱うのに何故それをそう呼ばぬのかと。その時は雑誌の命名を決心した。」こうして一九四四年一月マクドナルドの個人誌『政治』は創刊された。創刊号に言宣されている雑誌の目的は左の如くである。

▽左翼の意識形成の核となること。日常的現象の混沌の中に大きな趨勢を見出すこと。

▽政治をある政党・その指導者に限定するのではなく、社会・技術・文化・心理等広い領域に長期的展望をもち政治的論評をくわえること。

▽若い比較的知られていないアメリカの知識人、発表の場を

もたない左翼亡命者に意見発表の場を与えること。

▽芸術・音楽・文学を社会現象として捉えること。この際これまでアメリカの知識人に強く否定されてきた大衆文化に特別の注意をはらうこと。

さて雑誌の立場は「第三の立場」^{サード・ポジション}を採求する「社会民主主義者」のそれである。すなわち彼は教義ではなく、分析方法としてマルクス主義を考え、現代社会における非人間化を問題にし、ソビエトの本質を「官僚主義的集合主義」と規定、それを社会主義最大の敵とした。一方第二次大戦を善と悪の戦いではなく、ライバル関係にある帝国主義国どうしの争いと位置づけた。

こうして『政治』は一九四九年に廃刊されるまで、熱い戦争・冷たい戦争双方に反対の立場をとる。その影響力は尋大で、H・アレントによれば、ピークでもようやく五千部余という小雑誌で取沙汰されることが「大量に出回る新聞・雑誌の日々の糧となった」というほどだったという。⁽⁴⁾そして当初の目論見どおり、S・ヴェイユ、V・サージ、N・タツキ、N・シャラマント、A・カミュ、B・ベッテルハイム等多くの知識人を米論壇に紹介した。若きミルズもその一人に他ならない。I・ハウは

次のように回想している。「ミルズが知識人の世界ではじめてその名を知られるようになったのは：マクドナルドが『政治』を出していた頃だった。その頃はちょうど大戦の後で、幻滅の空気がたちこめ、左翼知識人は四散していた。ただ『政治』の編集者としてのマクドナルドの個人的熱情だけが、ある種の左翼コミュニティを維持する可能性：をつくり出した。こうした絶望の淵に突然：ミルズの姿が登場した。教義で硬直化することもなければ、恐れで軟弱化することもないラディカル。かつて歴史の流れにのみこまれてしまうことのない一人のアメリカ人。自分の専門領域ばかりでなく、ジャーナリストイックな面での才能も兼備したアカデミシャン。そんなミルズの姿が登場したのであった。⁽⁵⁾このミルズの出世作とも言うべきが「無力な人々―知識人の社会的役割」⁽⁶⁾である。この論文でミルズは独立ラディカリスト、マクドナルドの明白な影響下に、非人間化された官僚主義的社会の中に組込まれた「超然たる傍観者」たる知識人の無力さを批判している。

右のようにこのメリーランドの日々は、ミルズを独立ラディカルの政治的知識人たらしめた。むろん彼の思

想的動揺が一扫されたわけではない。しかし帝国主義戦争、そしてそれを推進する非人間化された官僚主義的社会機構に対する批判眼は着実に養われていった。政治家・企業家・知識人がこぞって戦争に奔走している状況それは彼にとりどうしても一過性のものとは思えなかったのである。その中で新しい研究の問題意識が練成されてゆく。今や世界の動向を左右するに至ったアメリカの行動を決定するものは誰なのか。「不況—戦争—好況」というアメリカ史のリズム、そして「レナリクスマイト軍国」恒久化の予兆を醸しているのは何なのか。かような重要問題について民主的決定が行なわれているのか。民主的主体というアメリカ国民像は実像なのか。様々なイメーシの絡み合いの中、こうした不安と疑問の混淆した意識が涌出してくる。——父と祖父。牧場と都会。テキサスの「シタリーロボット」。クールで無力なメトロポリタン。ビヒモスとヨーロッパの大衆。力強い労働組合指導者。産業と営利。大恐慌とニューディール。そして二つの大戦。ミルズの想像力はこれらを社会科学の視座の上に融合する。一つの問題意識が鮮かに結晶化していった。その母胎となったのはウェーバーの階級論(9)に他ならない。

こうして四〇年代初頭、ミルズは労働者・中間層・権力エリート(10)の調査研究を開始した。やがてそれは階級三部作として結実する。

- (1) Macdonald, D. "Letter to Editors" *Partisan Review* July—August 1943. またフンクナハート『ヒルチサマンゴト』の確執、彼の経歴に関しては Gilbert, J. B. *Writers and Partisans: A History of Literary Radicalism in America* 1968 を参照。
- (2) Macdonald, D. "Publisher's Preface" Reprinted ed. *Politics* (Greenwood) *Radical Periodicals in United States 1890—1960* also in Colin, J. R. *The American Radical Press 1880—1960*
- (3) Macdonald, D. "Why Politics" *Politics* Feb. 1949
- (4) Arendt, H. "Introduction" Reprinted ed. *Politics* op. cit.
- (5) Howe, I. "On the Career and Example of C. Wright Mills" *Steady Work: Essays in the Politics of Democratic Radicalism 1953—1960* 1966
- (6) Mills, C. W. "Powerless People: The Role of Intellectual in Society" *Politics* Vol. 1 No. 3 (April 1944) 反響を引いた Herman, J. "Intellectual and Bureaucracy" *Politics* Vol. 1 No. 4 (May 1944) 等。
- (7) Mills, C. W. "Powerless People" op. cit.

(8) 詳細はRG②等を参照。

(9) この頃ミルズは同誌にウェバーの階級論を翻訳・掲載した。Weber, M. "Class, Status, Party" translated and eds. by Gerth, H. H. & Mills, C. W. *Politics* Oct. 1944 アメリカ社会の特殊性を顧慮し、階級・身分・権力というウェバーの階級論に、職業をくわえ、これを基軸にするのがミルズ階級論の特色。Gerth, & Mills, *Character and Social Structure* 1933 p. p. 306—341 [以下CS]

四 非合理主義

一九四五年第二次大戦終結。終戦を境にミルズはラザースフェルト創設のコロンビア大学応用社会調査局労働調査課長の職に就く。任命者はマートンであった。そして翌年からは準教授として教鞭もとるようになる。さて終戦後も『政治』誌は変わらぬ活発な活動をみせていた。それは知的世界の一つの核とも言うべき存在だった。しかし終戦後の世界情勢の変化は、ラディカル達に新たな問題を提起する。それをめぐり誌上で様々な議論がたたかされた。そしてこの論戦は一つの分水嶺を顕在化した。

マクドナルドは一九四五年一二月号において雑誌の軌道修正を表明している。⁽¹⁾ その「新しい道」とは「昨今の経験に照らして、今日の主要な左翼イデオロギーを批判すること。そして人間的に満足のゆく社会へ至るにはどうしたらよいかという中心問題への新しいアプローチの仕方を探求すること」であった。そしてこれに呼応する形でW・ハーバード、A・ボタウ、D・カルホーン等が、米・独・ソ等における全体主義国家の問題、革命の手段としての平和主義・非暴力主義の問題、その基底としての人間主義的個人主義の問題、社会主義の道徳的再規定の問題等について論じていった。⁽²⁾ マクドナルド自身も稿をあらため自説をさらに展開している。⁽³⁾ ——戦時中のユダヤ人虐殺、ドイツ諸都市の無差別爆撃、ヒロシマ・ナガサキの惨状。昨今のアメリカ「福祉国家」の有様、ソ連におけるスターリニズム。これらを比較する時、恐しい人間性喪失の構図が浮揚する。特にアメリカにおいて、戦争は労働者にとり革命のチャンスであるが如く吹聴されていた。しかし戦争と共に労働者は合理性を失ない、「全体主義国家の官僚制の中に組みこまれてしまった。」⁽⁴⁾ こうしてアメリカにおける左翼の沈滞を批判したマクド

ナルドは批判の鋒先をさらに米・ソの「全体主義的國家官僚制」の背後にあるデューイ・マルクスの「非歴史的な絶対的価値としての進化」にむける。そしてマクドナルドの提出したアンチテーゼは徹底した否定主義・非現実主義・個別主義・無政府主義であった。⁽⁵⁾

他方これに共鳴するP・グッドマンがこの頃一文を寄稿している。⁽⁵⁾ フロムはフロイトを修正することにより人間の「本能」を批判した。しかしこれは産業主義の現状肯定につながるものである。「本能」の解放こそが革命につながるのだ。こうした彼のフロム批判の眼目は、ライヒを踏襲しつつ、フロイトを革命の哲学として蘇生することにあつた。

これに対しミルズは反批判を提出した。⁽⁶⁾ 論点の第一はグッドマンの革命観への批判、第二は自由観への批判である。——革命の如き歴史的社会動態はグッドマンの言う如く生殖腺等によって説明されはしない。それはむしろ政治的・経済的秩序の問題なのだ。彼の革命的理想は「寝室からバリーケードへ」ではなく「寝室から寝室へ」というものになっている。一方「自由とは諸個人および諸階級に開かれた役割の選択における自由に他ならな

い。」したがって自由はこれら役割の制度的配合から考えるべきであり、生物学的衝動と制度的構造間のコンフリクトの不在を意味するのではない。自由は個人により独立に達成されるのではなく、社会構造を変えることによってのみ、人は集合的に個人的自我を変えるのだ。

機能的合理性の貫徹に対し、直接的・抽象的に対立させられている非合理的要素、人間の真実として聖化された性衝動。ミルズはそこにあるいは衝動の社会化を、あるいは代償的渴望アンペクトンを見た。ここにフロム・ホルナイの強い影響が窺える。ミルズの志向の所在は、人間性・非人間化の社会科学の考察と政治的打開に他ならない。この再合理化の意志を他方で支えるのが、彼の経験科学精神であった。ミルズはその社会心理学の理論的展開にあたり、性格構造の三要素として有機体・心的構造オメガニズム・心的構造サイキック・ストラクチャー・人パーソナを析出し、制度的社会構造とのかかわりで、その動的相互関係の定式化を試みている。そこでの基本文脈はあくまで社会であり、内面的一要素の神秘化は絶対回避さるべきことであつた。したがって社会学の志向をもつ新フロイト主義者も、心的構造を形而上学的前提とする時、批判の対象となつている。⁽⁷⁾ まして有機体的衝動を前

提とした心理主義的議論は言わずもがなと言えよう。

確かに他方でミルズは、官僚主義蔓延・左翼知識人の無力さへの批判意志、反全体主義、反戦平和主義という独立ラディカルの思想を共有していた。しかし分水嶺が顕在化した今、自らの新たな批判前提が論理的に確定されねばならない。「理性的なもの」⁽⁸⁾——公衆・道徳・想像力等——の探求として、やがてこの問題は自覚されるところとなる。さて「新しい道」以降ミルズは『政治』誌と袂を分かつことになる。マクドナルドとの交友は表面的には続いたけれども、彼はほとんど同誌に投稿しなくなった。そして人間的政治主体の存在という信念を、労働組合への信頼という形で貫こうとした。

- (1) Macdonald, D. "New Roads in Politics" *Politics* (Decem. 1945)
- (2) Herberg, W. "Personism against Totalitarianism" *ibid.* Volaw, A. "Toward a Personist Socialist Philosophy" *Politics* (Jan. 1946) Calhoun, D. "Non-Violence and Revolution" *ibid.*
- (3) Macdonald, D. "Root is Man" *Politics* (April & July 1946)
- (4) 「新道」の詳細は RG ① p. 121 ff. 参照。

- (5) Goodman, P. "The Political Meaning of Some Recent Revisions of Freud" *Politics* (July 1945)
- (6) Mills, C. W. & Salter, P. S. "The Barricade and Bedroom" *Politics* (Oct. 1945)
- (7) C. S. p. p. 19—36 p. 37 ff. および CS p. 112 ff. esp. p. 113 NB 2
- (8) SI. PE. 等これはもちろん彼が批判する機能的合理性の探求とは異なる。

五 労働運動

ミルズの労働運動に対する信頼は、すでにメリーランド大学赴任当初聞揚されている。若きミルズの眼差しは J・ルイスに注がれていた。一九四二年 C I O の戦争支持政策に反対し、炭鉱労働組合と共に C I O を脱退したルイスは一九四三年春賃金問題をめぐり就業停止戦術にうって出る。すぐにルーズベルトが介入したが、ルイスは経営者と政府をむこうにまわし渡り合った。戦時経済ということも手伝い、世論は反労組色を強めた⁽¹⁾。その中においてミルズはルイスに好意的批評をしてゐる。⁽²⁾「労働者は行政機構と効果的に騒動を繰り広げているルイスに感謝せねばならぬ。」「私はこれほどまで経営者や行政

と効果的に「渡りあえる他の権力集団を知らない」と。しかしここでミルズは、労働者を第三政党を作りゆく社会主義勢力として評価したわけではなかった。むしろ彼の評価は、一つの権力集団としての労組に向けられていると言つてよい。権力を手にするか、社会主義の原点を貫くか。多くのラディカルが直面し、ミルズの中でも繰り返されるこの葛藤に悩みつつも、彼はここではルイスの現実性を評価した。

さてマクドナルドとの溝を感じはじめたであろうその頃、ミルズはインター・ユニオン・インスティテュート（IUI）のJ・B・S・ハルトマンと知り合っている。ロシアから来米した彼は、アメリカの労働運動に参与し、四〇年代中葉には労働問題の知的研究者・指導者として知られていた。そして一九四五年四月「分析的な、無党派の」雑誌『レイバー・アンド・ネイション』を創刊した。⁽⁴⁾同年彼を紹介されたミルズは、彼と労働問題について語りあうようになった。彼は「労働運動への直接的参加経験のない」ミルズの「過度に理論的で実践経験の裏づけのない意見」を「ナイーブな意見」といさめ多くの貴重な知識を与えた。⁽⁵⁾このIUIとビューローの資金援

助により、ミルズは精力的に労働運動の調査を行なっていた。そして彼は一九四五年八月を皮切りとして十一もの論文を『レイバー・アンド・ネイション』に発表。さらに編集にくわわる等、このフェビアン主義的組合誌と深いかわりをもってゆく。⁽⁶⁾

当時のミルズは、知識人と労働者の生産的相互依存関係を重視し、知識人に政治的活力を与えるものとして労働者を、労働運動を他の階層との融和のもとに社会運動に高めるものとして知識人を、それぞれ捉えていた。そこには自らの自己意識の投影がある。彼は言う。「何人かの知識人が現に求めていることは自らの能力と知性を、信頼できる運動に接合することである。彼らは多大なエネルギーと能力を左翼に資する組織に傾注する用意がある。そして左翼とはこの場合労働（者）を意味する」と。⁽⁷⁾ミルズは生産的依存関係が保持されるかぎり、労働運動への信頼を保った。なるほどこの時期、組合の官僚主義化への批判が高まりつつあったのは事実である。しかしミルズはその力と知識人の知性の協同に一条の希望を見出していたのである。

ミルズの調査研究の初成果『新しい権力者』もこの基

本的立場に立脚したものである。そこでミルズは世界動向の鍵とも言うべきアメリカの去就を左右する力を獲得しつつあるものとして組合指導者を定位し、これに社会学の考察をくわえる。現代アメリカ社会における労働組合の機能、組合内部での指導者の位置。これがこの研究のテーマであった。ミルズの組合指導者観は、そこでは次の如き叙述となつてあらわれている。「彼らこそが戦争と不況に向かう主たる潮流を阻止する組織を指導している」⁽⁸⁾。「不況—戦争—好況という現代アメリカ史のリズムの中で、労働組合は不満と怒りの調整者であり、組合指導者は敵意を制度上の径路チャネルに向ける代理人なのである」⁽⁹⁾。中間集団が無力化しつつある社会にあって、一方で労働者を指導し、他方で原子化するホワイトカラー等を活性化し、新しい社会運動を生み出すという「新しいパワープロックの創設および維持に戦略的地位を占めるもの」⁽¹⁰⁾。これこそミルズが組合指導者に与えた結論的地位である。そこには彼の労働運動への信頼がこめられている。しかしやがて五〇年代冷戦下のゆたかな社会と軍産体制のはざままで、労働組合の官僚主義化が否定できぬ現実となつた時、ミルズはその「労働形而上学」を峻拒

するに至るのである。⁽¹¹⁾

- (1) RG ① p. p. 92—96
- (2) Mills, C. W. "The Cases for the Coal Miners." *The New Republic* (May 24 1943)
- (3) RG ① p. 96 Mills, C. W. "Probing the Two Party State." *The New Reader* (Oct. 30 1943) 参照。
- (4) RG ① p. 143 [*Labor and Nation* vol. 1 No. 1 (Aug. 1945) p. 2]
- (5) RG ① p. 143 f. 443 NMP p. 295
- (6) RG ②
- (7) RG ① p. 147 [Mills, C. W. "Intellectuals and Labor Leader" unpublished Manuscript dated 1946 Aug. 4]
- (8) NMP p. 3
- (9) NMP p. 9.
- (10) NMP p. 266
- (11) RG ②.

六 社会学的リアリズム

右の研究と平行して新中間層研究が進行する。彼が体得した従来の経験的調査技術。その根底にはプラグマティズムと論理実証主義の融合を基底とする経験批判的・論理演繹的政策科学への意志、すなわち理想的共通価値

の体系的実現への意志がある。そこで志向される現実の「割り切り」は機能的合理性探求の営為に他ならず、この点でそれはパーソンズの実証主義的な「合理主義」と同根である。彼はこの本質の一面を「分析的リアリズム」として括ったことがある。そしてそこには主意主義的人間の實在という大前提があった。しかるにミルズの意志は理想的人間の虚偽性を批判するにあつた。むしろ彼とて従来の研究法を全く否定するわけでもない。むしろ政策科学への樂觀から論理体系・調査技術が実体化される時、それは官僚主義への批判性を失なつた虚構的方法的反映にすぎなくなる。ここに経験科学精神と批判精神の葛藤が対自化される。ミルズはその打開を単にその前提のイデオロギー的批判に求むるにとどまらなかつた。ホワイトカラーの深層の非合理性を、まずは認識のレベルで、次に政治的実現のレベルで、理性的なものにしようとするミルズにとり、新しい社会学的リアリズムの確立は、まずは葛藤的方法的打開として急務であつたと言えよう。

右にのべた新フロイト主義研究はその具体的一努力に他ならない。彼は問題意識を次のように闡明している。

「二〇世紀中葉のアメリカ社会は以前にもまして心理学的用語で説明されねばならぬ。何故なら今日我々をとりまく問題の多くが精神医学的のものであるからである。政治・経済状況を、個人の内的・外的生活に対するその意味という観点から説明し、それによりどのようにして個人がしばしば盲目になつたり、虚偽意識をもつたりするかを解明することが、今日の社会研究の重要課題の一つである。個人の日常的経験のうねりの中にこそ、近代社会の基本構造は探求されねばならぬ。この枠組のなかでホワイトカラーの心理も形成されているに相違ない。」

他方彼の文学的研鑽を忘れることはできない。ミルズは両親に次の如く書き送っている。「私はこの本を全く文句のないものにしてしようと思つています。単純にして簡潔な、しかし多くの含みとあやの織り込まれた文体。そこに私のささやかな芸術的努力が傾注されています。それはかつて私が建てたこともないような家を作る作業です。この本は単に科学的であるばかりでなく、職業的・芸術的のものでなければならぬのです。」

こうした努力の背後にはまたニューヨーク知識人への反発があつた。ミルズが「終生の友」と呼んだユダヤ系

知識人H・スワドスは次のように言っている。——一つの仕事を終えた安らぎの中で、ミルズはいつもある種の満足感にひたっていた。「本を書き、それについての論文を書き、またそれについての論文を書き……といったことを繰り返し、またそれについての論文を書き……といったことを繰り返すしか能のない、メトロポリタン知識人の視野を全く超えたことを私はできる。私が尊敬してやまぬ機械工、建築家、デザイナー」といった人たちと同じようなことを私はできるのだ。そうした満足感に彼はひたっていた。ミルズはこうした「徹頭徹尾の知識人」たち、とりわけユダヤ系知識人のスノビズムに反感を感じ、その知的サークルにあっても常にアウトサイダーの位置を占めていた。こうした一種の反感は、同じような苦々しさを感じていた私と彼をつなぐ「絆の一つ」であった。——ミルズはまずもって自律・独立の知的職人であった。

この過程でミルズはバルザック文学と出会う。バルザックの創る『人間喜劇』は、まるで戸籍簿と競争するかのようになり、あらゆる階層・職業・環境の人々を、生き生きと描出した。それはまさに当時のフランス社会の生きた風俗絵巻であった。他方バルザックもまた、社会の大

変動期に生き、公共の道德・慣習・理想の欺瞞を暴露したアウトサイダーであった。⁽⁶⁾そこにミルズは「自分」を見、彼に「社会学者」の呼称を与えた。⁽⁷⁾「バルザックは科学的発見と詩を調和させ、詳細な事実を重ねることにより視覚的効果をねらった。ミルズも統計を集積し、それを怒りに満ちたメタファーでまとわせる。」⁽⁸⁾D・ベルは皮肉を交え、そう言っている。ついでながらミルズがバルザックを介してルカーチの『ヨーロッパリアリズム研究』に学んでいることにも注意したい。そこには「茫漠とした総体性」への予感がある。⁽⁹⁾

さてこの他の文学的工夫として、センセーショナルな書き出しや、ヴェブレン流のオキシモロンの多用等が指摘されうる。ともかくそうした努力はいずれも虚偽性の暴露と想像力の活性化を核心とするものであることは疑いえない。そして「社会学的想像力」はその核心の対自的表現に他ならない。

(1) Parsons, T. *The Structure of Social Action* 1937. p. 728 f. f.

(2) この部分はSIの記述によっている。しかし紙数の関係で数量調査と一般理論の速読、および人格論・方法論・

社会形態論・政策論等々の諸次元の連関について展開が不十分である。また筆者自身の最終的評価「およびいわゆる「残余部分」の理論的処理の問題についても留保してある。とりあえずは富永健一「社会変動研究における実証主義と理念主義—『思想』一九八三年一〇月、稻上毅『現代社会学と歴史意識』一九七三 Alexander, J. C. *Theoretical logic in Sociology* vol. 1 1982 等参照。

- (3) WC p. xx
 (4) RG ② [Mills to Parents 18. Decem. 1946]
 (5) Swados, H. "C. Wright Mills: A Personal Memoir." *Dissent* x. No. 1 1963
 (6) Bell, D. *The End of Ideology* 1960 p. 48
 (7) RG ② (ミルズの講義テーマとして)。
 (8) Bell, D. op. cit p. 47 また Eldridge, J. C. *Wright Mills* 1983 p. 141 f.
 (9) Mills, C. W. "IBM Plus Reality Plus Humanism = Sociology" *Saturday Review of Literature* May 1 1954

七 大衆社会論

ミルズの科学的・職人的・芸術的努力の結晶たる『ホワイトカラー』が一九五一年九月六日遂に出版の運となった。ここに展開されている原子化する中間層の生活・意識の歴史的分析。それは重複する欧米の状況という判

断の経験的実証に他ならない。——独立独歩の旧中間層、彼らが形成する自律的社会、そこにおける自由・理性・多様性・実用性といった価値。それらの実質はアメリカ社会の交動、富の集積過程において崩壊した。彼らは「ルンペンブルジョワジー」と化し、諸々の価値だけが形骸化された修辭的イデオロギーとして残った。この新中間層の世界では營利ジラネの論理と官僚の論理が席卷し、画一的統制を行なう。人々は巨大な制度が与えるイメージで自分自身を捉え、それが求めることを欲するようになる。彼らは古い諸価値に縛られ、「過剰開発社会」に満足し、誇りさえもち、その実質は「バースナリテイの市場」で自らを売却し、ハイラーキカルな梯子を一つでも高く登ることに終始するもの、社会の動向に一切決定権をもたぬ「陽気なロボット」となっている。——こうした鮮烈な分析は大反響をおこし、各種書評は一八に及んだ。

就中特筆さるべきはマクドナルドの書評である。大戦後の世界情勢に絶望したマクドナルドは一九四九年『政治』を廃刊し完全に政治評論から退いていた。その彼がこの書を次のように批判した。⁽¹⁾——記述的社會学者ミル

ズはリンドを模しているのか。ヴェブレンに追従しているのか。それともマルクスにか。リンドの著作の秀逸は、文才や一般化の才によるのでなく、事実をもって語らせているによるのである。しかしミルズは特定のデータを文の随所に挿入し、その特定の事象についての抽象的記述を、修辭を駆使し、一般的具体的記述である如くみせている。さらにミルズはヴェブレンの如く自分の社会学に道徳的判断と美的印象を融合し、古い暴露家を気取っている。中間階級に対する彼の感情は明白である。彼は荒唐と不幸を予言する。しかしその正しさはマルクスの黙示録の体裁（メッセジヤ）においてのみである。彼はあまりに多くの一般的なことを、あまりに少ない紙数、あまりに特殊な事実に述べている。理解しがたい現代社会を前に彼は「無力さと混乱をおぼえていると思う。ちょうど私がそうであるように。ただミルズだけがそれを認めようとしていないのだ。それで彼は一冊の本を書き、関心も、考えも、興味すらないのを偽っている。煽情的・抽象的言葉を精力的に操作し……何も言うことのできぬ事実から逃げ出さないようにすることによって。」——核心を衝くこの酷評の裏には少なくとも嘲笑はない。確かなことは鮮やか

な対照をなす二つの良心の苦悩である。マクドナルドは変節(2)の呼称を忍受する。そしてミルズは次々と自ら希望を粉碎しながら、知識人に、東欧・アジア・キューバの社会主義者に、そして観念的新左翼に新しい希望を見出してゆくことになる。そこには必然とも思われる良心の喜劇がある。

おりしも朝鮮戦争を契機として反共感情が高揚し、マッカーシズムの嵐が吹き荒れていた。冷戦は依然続き、軍備はヒステリックに増強されてゆく。他方現代文明の所産たる高度消費社会が確立される中、労働者が、知識人が右傾化の度を強めてゆく。もはや労働者に新しい権力ブロックの担い手を見ることはできなくなっていた。彼の眼は中間集団の完璧な無力化を映じていた。エリート・トーマス図式は痛ましいまでに「妥当」してゆく。

一九五六年ミルズはこの絶望の淵で『パワーエリート』を世に問うた。そこでミルズは、自由に満ち、理性的公衆が自律的権力を行使する世界に冠たる進歩的民主国家アメリカという「虚像」を暴露した。彼は一方で軍事・政治・経済という権力エリートによる社会支配の諸相を、他方で大衆の意識・行為がステレオタイプにより

画一的に統制される様を描いた。「底辺では大衆社会が出現しつつある。」⁽³⁾これが彼の時代診断である。そして彼は大衆社会化・冷戦状況を生ぜしめている権力エリート⁽⁴⁾の無責任を激しく非難した。

こうしてミルズはエリート・マスマス図式を怒りにまかせアメリカ社会に叩きつけた。その分析はたしかに彼が一貫して追求した戦争と国家、さらには経済・文化・社会形態の連関の一面を鋭く抉るものであった。しかしそこには批判精神の悲劇的完勝がある。すなわち社会的現実との不一致というイデオロギー的反批判はともかくとして、近代化・大衆化・バタインの実証的・理論的吟味不足。大衆・権力等諸々の概念規定の不備。出口なしのベシミズム等は指摘されねばならないであろう。

しかしミルズは全体主義社会との同一視とも言えるこの社会分析に積年の課題決着を見ていたのであろうか。彼の苛烈な批判は応急的・戦略的なものではなかったか。彼の第三次大戦論を見る時、右の批判の暫定的性格がすぐさま明らかになる。彼にとり東西権力エリート⁽⁵⁾の無責任は大戦の「直接的原因」にすぎない。彼は「窮極の諸原因」を二〇世紀の世界史形成の論理にもとめ、これを

説明すべく「文化装置の社会史」⁽⁵⁾という見地を提出し、さらに「国際比較社会学」⁽⁶⁾を構想した。その核心は近代化・大衆化のバタインの理論的・実証的探求に他ならない。他方彼がその批判前提たる公衆概念を理論的につめているのは流石と言わねばならないであろう。ここには道徳・文化等の理論的反省、理性的なもの⁽⁷⁾の探求の意志が窺える。政策科学の神話が崩壊しつつある今日、この営為を道徳主義と一蹴することはできない。⁽⁸⁾

しかしミルズは行政的媒介を峻拒するわけではない。彼は言う。「官僚以外の観点から『統制』を問題にし得るか。むろんできる。様々に『集団的自己統制』が構想されてきた。」「官僚以外の観点から『予測』を問題にし得るか。むろんできる。…もしJ・S・ミルの言う社会の『媒介原理』が把握されたなら、もし我々が社会の重要な動向を把握することができたなら、要するに我々が現代の構造変動を理解し得たなら『予測』の基盤を獲得することになるであろう。」⁽⁹⁾こうしてミルズの社会科学の懷疑精神は現実的根拠⁽¹⁰⁾を探索していた。しかしこの実直なるトリックスターはあまりに早く逝き、創造は停止した。一九六二年三月三〇日、享年四五歳である。その

反省的知性の展開は今後進の手に委ねられていゝ。

- (1) Macdonald, D. "Abstractio ad Absurdum" *Parisian Review* vol. 14 No. 1, 1952
- (2) RG ① p. 141 RG ②
- (3) PE p. 324
- (4) Mills, C. W. "Balance of Blame" *The Nation* June 18 1960
- (5) Mills, C. W. "Cultural Apparatus" *The Listener* vol. LXI No. 1565 1959
- (6) Horowitz, I. L. "The Unfinished Writings of C. W. Mills" *Studies on the Left* vol. 3 No. 4 1963
- (7) (a)意見の受け手とはほぼ同数の送り手があり、(b)表明された意見に対し迅速、効果的に反応する機会を保障するコミュニケーションが存在し、(c)この討論を通じて形成された意見が、効果的行動として実現される通路をもち、(d)制度化された権威の浸透がなく、自律的に行動する存在。(PE p. 303)これが「公衆」である。これは大衆化の文脈解明の拠点であり、「文化装置の社会史」の発展段階論へと発展する。また近代の理想的人格の概念化として今日の意義を有する理論的成果である。(但し(a)は検討の必要あり)
- (8) 西部邁『経済倫理学序説』一九八三参照。
- (9) SI p. 116 f.

まとめ

最後にミルズの社会科学的懐疑精神の展開を概略的に整理しておくことにしよう。(理想的契機には(I)を、現実的契機には(R)を付す。)

(1) ミルズの精神史の始元には、産業主義への漠とした反発、自律的人間像、プラグマティズムの経験科学精神、ヴェブレンの懐疑精神、ウェーバーの歴史的・構造的な分析への意志があった。(本文第一節。以下同様。)

(2) ミルズはナチ・ビヒモスと無縁でないアメリカという判断——「不況—戦争—好況」というリズム、軍国恒久化の予兆——を基本モチーフとして、現状の批判的・歴史的・構造的な分析(R)とその政治的打開(I)にむかっただ。(第二節)

(3) その方法的核心は現状の批判的対象化にあった。

彼は手がかりを求め、①フロイト主義、②リアリズム文学等を研究した。そして現状分析(R)・政治的打開(I)という二レベルで理性的なものを探求した。(第四・六節)

(4) 一方で彼は大衆化しつつあるアメリカ社会の総体把握(R)を試みた。——①不況と戦争。過剰開発という有

効需要開発—福祉経済の本質。②中間集団無力化・原子化という集団構造・社会形態。③画一化されたイデオロギイ的価値・文化。④官僚主義的支配権力の本質。しかも彼はこの「基本構造^{フレームワーク}を個人の日常的経験……の中に探求」(W.C. P. xx)しようとした。(第七節他)

(5) 他方彼は政治的打開(I)の為、①独立ラディカリズム、②労働運動にコミットした。①は社会の非人間化批判に、②は新しい権力プロック形成・中間集団活性化の戦略に重要なものであったが、ミルズの期待は裏切られた。(第三・第五節)

(6) この現状の閉塞性は権力エリートの大衆支配という戦略的・応急的批判を余儀なくした。しかし彼は一方で国際比較社会学(R)を、他方で新たな知識人・道徳・文化論(I)等を準備していた。(第七節)

——ここに顕在化するミルズの思想的営為(I)の核心は自らの理想的人間像の探求であり、科学的営為(R)の核心は人間性変容およびその文脈の総体把握である。そして

両者の統一が、すなわち媒介原理探求における理念構築が志向される時、それは現状打開の客観的根拠探求という実践的営為となる。この約束された地平において彼の理論・実践は一応の論理的完結をみると言えるであろう。しかしそこで歴史の目的地^{テポメス}が設定されることになるのか。あるいはその理性探求は再び否定の弁証法——それは：「ではない」という規定——に委ねられるのか。またその社会科学的懷疑は一つの戦略的スタイルとして対象化・理論化されうるのか。——等々新たな疑問が喚起される。ともあれアメリカの理想をもとめ、アメリカの現実を批判したミルズの営為はこうしたすぐれて現代的な諸問題と共鳴し、社会学思想史の一焦点として尚^{ポテンシャルティ}潜在力を有す。これが本稿の結論である。むろん本稿はさらなる実質的検討にむけた序説的作業としてミルズ大衆社会論の諸契機を簡単にスケッチしたにとどまる。

(一橋大学大学院博士課程)